

「生きにくさ」「社会的矛盾」 に直面するなかで

農村女性の仕事おこし、イタリアの社会的協同組合

田中夏子(長野大学産業社会学部助教授)

10年前、東京から信州に移り住み、非常に地道ですが広範に農村女性の直売や加工事業が広がっているということを知りました。そこには蓄積された非常に示唆に富むいろいろな発想があり、そのうちのいくつかをご紹介しますと思います。

農村での女性の仕事おこしというのは、1970年代位から少しずつ、改良普及員さんや農協の生活指導員さんによるグループづくりを通じて広がってきました。同時に先ほど堀内さんからご指摘がありましたように、インフォーマル労働が非常に多い部分でもあります。当事者の女性からしてみれば、それが一面では抑圧された状態ではあるのですが、もうひとつ彼女たちがよく言うのは、制度の枠外にあって、支援の対象外にあったから自分たちのペースを大事にできたんだ、ということです。

私も基本的には、「インフォーマルな労働をフォーマルなものに、社会的認知の対象にする」というのは大事なことだと思っていますが、しかし、いまあるフォーマルな労働がベストな形なのかを問いながら、インフォーマルな労働をフォーマル化していく

ことが課題になっていくのではないかと考えています。こういった問題意識は、非営利・協同の事業組織を見るときに共通するものだと思います。

15件の農村女性の事業組織を歩かせていただきました。1度きりでは良くわからないので、何回も通って調査をさせていただきました。そんな中でここでは一番大事な3つの特徴をあげていきたいと思います。

1つ目は、自分が住む地域の5年後、10年後を想像し、そこで豊かに老いていけるかという不安を一つの起爆剤にしながら仕事おこしが始まっていった、ということです。

2つ目は、自分たちのつくっているもの、売っているものの「素性」を徹底して明らかにし、その公開された情報をきちんと消費者が受け止められよう、消費者を対象とした学習活動を事業の中にセットするところまでやっておられます。まさに実質的な参加を保障する活動だと思っています。

3つめは、女性の共同事業組織ではよく見かけられることなんですけれども、事業に携わる者同士の健康や家族の状態を配慮しながら、仕事の組み立てをしている、ということ



です。いま自分は100%の働き方ができるが、別のところでは同じメンバーが20%しか働けない。20%の方が肩身の狭い思いをしないで済むような職場づくりをしようということが意識されていたように思います。

余談になりますが、「起業」とか「ビジネス」というとすぐに「事業高はいくらですか？」という話になっていってしまって、それは私たちの思いとは少し違うんですね、と指摘されたことがあります。こういった活動を深めていく上で、自分たちの歩みにじっくりくる言葉を探すということも大事なのではないかな、と思います。

仲間を大事にし、市場にも慎重にだが接近していく。自分の生きにくさが出発点なので、人の生きにくさにも適切に反応して「公共性」を生み出しているのではないか、と思っています。

私は「非営利・協同」というのはやむにやまれぬ内側からのエネルギーに突き動かされてできてくるものだと思いますので、やたらに外国の事例を話すのは控えた方がいいのかな、と思っているのですが、ここでは参考になるイタリア社会的協同組合の事例

をエッセンスとしてお話をさせていただきたいと思います。

あまり耳慣れない言葉ですが、イタリアの社会的協同組合は小規模な労働者協同組合で、福祉・健康・医療・環境保全・文化・教育・就労支援など幅広い分野で社会的サービスを生み出しています。就労組合員だけでなく、利用者もボランティアも、さらに自治体が組合員になっているところもあります。

法律では、『市民の人間としての発達および社会参加について地域の普遍的利益を追求することを目的とする協同組合』とされています。これは、先ほどの議論であった福祉の対象から権利の主体へ、というところと重なります。

この協同組合が法制化されたのは1991年ですが、70年代にはいろいろな組織の活動が起こっていました。例えばアルコール中毒、薬物依存から抜け出そうとしている人たちには公的サービスがありますが、その両親のもとで育つ子供には公的サービスの手が及ばないわけです。そこで、生きにくさや社会的矛盾と直面した当事者が自分たちの手でそれを克服しよう、あるいは支援者とともに克服しよう、という形で社会的協同組合の前身となるさまざまな組織がつけられていきました。

法制化以後は、単に社会的認知を得るだけではなく、むしろ、市場や行政に新しい価値や発想を提起し、しかもそれに見合った政策手法を開拓してきているところに特徴があります。

そして、既存の市場に参入しながら、既存の市場をつくりなおしていくという「二重の任務」を意識的に追求してきました。就労支援を例にとると、協同組合が失業者に就

労教育、職業教育、職能開発の教育サービスを提供しますが、同時に、受け入れる職場のあり方自体を再編しないかぎり、人間らしく働くことはできないんだ、という問題意識があります。田中羊子さんの話と共通で、労働市場への復帰をめざすが、労働市場の側の欠点も直していく。この2つが社会的協同組合の大きなねらいです。

もちろん理想的な面ばかりではありません。社会的認知が進むにしたがって協同組織自体の硬直化、行政との馴れ合いも生ま

れてきます。生活クラブ生協の池田さんが、自主監査などによって自らを律していく発言をされておりましたが、イタリアの社会的協同組合も会計監査と同時に社会的監査を採り入れ、自分たちの事業をきびしく振り返ることを自らに課しています。



(追加討議)

池田

私たち生活クラブ生協・千葉が自ら生み出したといえるコミュニティビジネスの事業体は、本体は生協法人で食べ物の事業と福祉事業をやっています。また社会福祉法人で施設を運営するたすけあいクラブというものがあります。また株式会社生活サポートクラブがあります。それからNPOせっけんの街という廃油リサイクルの事業体、

NPO 千葉市民活動市民事業サポートクラブという中間支援団体があります。

また、直接ではありませんが、生協を母体としてさまざまなワーカーズコレクティブが活動しています。これらを総称して事業系NPOという言い方をしますが、事業系NPOを拡大し、政策提案能力を高め、地方行政や地方政治への政策影響力を高めていくことが重要で、そのためにも事業の実体を持った活動が息づいていかなければいけないと思っています。

また、「自分らしい地域生活支援研究会」「小規模デイサービス・グループホーム千葉県連絡会」「ユニットケア全国セミナー」などの活動を土台にした、県や市町村への福祉政策提案の取り組み行っています。そうした取り組みが下敷きになって、千葉県の前年度重点施策「アクションプラン2003」へも提言しています。

田中(羊)

センター事業団は、一人ひとりの組合員が主体者として成長することにもっとも価

値を置いてきました。仕事を通じて率直に人とぶつかりあい、失敗しても、思い切り主体者としてがんばることに価値がある、という協同組合の中で自分を成長させてくれたように思います。自分を変え成長させるということは、人と関わり、その人が成長し変わることに一つのことだということが見えたときに、協同労働で働くことの意味を感じました。高齢者協同組合も、高齢者を社会的弱者ではなく、自分の高齢期を切り開く主体者とした。人間をいろんな可能性、力をもっている主体者としてみて、その力をもっとも自然に発揮されるありようが協同労働なのだと思います。

ケアワーカーの仕事は、人の潜在能力を信頼して引き出す仕事で、人の成長・発達そのものを対象とする労働であり、そこでの協同労働の意味はより深く問われるし、実感できるものになってきているのではないかと思います。

労働者協同組合は変な協同組合で、小さな組織なのに、自分たちが日本を背負ってような自負があり、低い委託料なのに切り詰めてお金を残し、“全国観点”を強調し、自分たちさえ働けばいいということではなく、この働き方や、仕事を待っている人のために全国に広げようとやってきました。普通、協同組合はまず組合員の利益のために事業があるのに、私たちの場合そこはいったん置いて全国のためにがんばってきて、でも今振り返ってみると、地域福祉事業所をつくったことで、自分の親の介護を仲間がやる、子供を一緒にケアする、そういう生活そのものも支えあっていく姿が、ほのかにだけど、みんなに実感できるところにきたのかなと思っています。

荒井

コミュニティビジネスというのは、新しい言葉でわかりにくいのですが、簡単にいえば住民が地域の問題解決を行うということです。その中で個人の生きがいづくりや雇用の創出、より良いまちづくりに寄与する、ということなんですね。

それで、私たちが今年12月にシンポジウムを行い、来年の1月からは8回の連続講座を予定しています。これは県の緊急雇用対策の予算で行います。また、我孫子市は、市民団体育成の意味で業務委託をする場合、NPO法人に限らず、市民団体で社会的に評価されているところを対象にしています。

田中(夏)

市場に参入しながら市場的な発想を組み替えていくとは、どういうことなのか、あるいは行政と緊張のある協同関係を生み出していくとはどういったことなのだろうか、という問いに答えていかなければなりません。いろいろな論点があると思いますが、一点だけお話しします。

それはいま進行している行政からの外部





問い掛けをしていくことが必要なのではと思います。

教育現場に身をおくものとして、この非営利・協同の運動と関わることは自分の仕事の捉え返しと考えていま

委託にどう向き合うか、という問題であります。私の周りにある自治体の外部委託の基準を見てみました。外部委託の留意事項として、「細分化して切り分け可能なもの」、「コスト削減が確実なもの」、「いろいろな部署の仕事を集約することスケールメリットが追及できるもの」、あるいは「業者が複数あり競争が成立するもの」などといった技術的なところに集中した言及になっています。

住民との対話の第一線でやってきた公務労働者の実績を認めた上で、なお、果たしえなかったことは何か、なぜなのかをクリアにし、仕事のありかたをもっと本質的なところでぶつけあいながら、アウトソース(外部委託)の基準をつくっていくべきではないかと思いました。

これは実感なのですが、イタリアの社会的協同組合の傍らには、必ずこのような真摯な問いかけをした公務労働者がいたように思います。このような公務労働者と組んで社会的協同組合は発展してきました。そういう意味で今日は荒井さんのお話に感動したのですが、非営利・協同の側も、行政が提示してくるアウトソース事業が、こうした一連の見極めをへたものであるかどうか

す。非営利・協同の仕事をどう育てていくか、は私自身にとっても非常に切実な課題です。

菅野

事業型NPOの重要性があらためて明らかになったように思います。また、協同労働がこれを利用する人や仕事を求める人たちの関係の中で存在していることも鮮明になってきました。さらに、コミュニティビジネスへの支援がNPO法人に限らないかたちで我孫子市で始まり、外部委託における基準を公務労働者と非営利・協同が共につくりあげていくことの大切さも指摘されました。協同労働を考えていく重要な議論でした。

(参加者の感想)

- ・ いろいろな取り組みがあることを知りました。NPOとか協同の意味をもっと勉強します。(19歳女性：千葉大学学生)
- ・ 女性の発言は聞いていてとても明瞭でわかりやすく、勇気付けられた。これからはやはり協同労働が社会を明るい展望のもてるものにしていくだろう。(女性：地域福祉事業所)
- ・ 「人間が生きていくために協同は大切なこと。人と人との結びつきの中で自分らしく生きていく。」という言葉が、このさき生きていくうえで大きな働きを持ちそうだと感じた。(19歳女性：千葉大学学生)
- ・ 田中羊子さんのお話で、ホームレスの自立支援が印象に残りました。子どもからお年寄り、ホームレスの方まで、本当に幅広いなあと思いました。これからの社会は、協同労働がもっと地域の中で広がっていくと思います。(36歳女性：高齢者協同組合)
- ・ 何故今、全国から人が集って協同を問うのか、介護・福祉に関わる生き方、どう地域との関係、人と人との結びつきを変えていくのかを、介護・緑化・食・子育ての現場の中で、生き方・働き方が変わっていく事例や、パネラーの発言の比較で理解できた。介護保険開始直後の一昨年以來、2年を経た労協・高齢協の協同労働の協同組合法制定をすすめた道筋と全国の労協の仲間の事業の積み重ね・活動実践の内容が一つ一つ実を結んで来た具体的結果が、新しい時代を切り開いて来た事が、特に田中羊子さんの発言で鮮明になったと思う。(53歳男性：労働者協同組合)
- ・ 我孫子の取り組みは新聞などで見ることもあり、他自治体も少しでも近づいてくれれば、と思っていました。現在ヘルパー活動をしていますので、自分の働き方・関わり方など、参考になることが多くありました。(53歳女性：高齢者協同組合)
- ・ 「労協」って、「今ある会社の不条理を打破するもの」というイメージを漠然と持っていた。しかし、ただ会社という箱の中で活動するのではなく、「自分が自分らしくあるための新しい職場」をつくるという創造的なものなんだと知り、何か将来に少し希望が見えた気がした。(19歳女性：千葉大学教育学部)
- ・ 行政と非営利・協同の組織、市民社会をどうつくるのか、社会の大きな流れを再認識することができた。いずれにしても市民主体、市民主権を位置づけて、事業や運動、ネットワークづくりを進めていくことが基本と感じました。(36歳男性：労働者協同組合)
- ・ 協同労働の主旨はわかるが、将来的に企業化する心配はないのだろうか。目的は利潤追求ではないとしても、その活動に資金は必要となる。人間らしさと労働の関わりを問い直したい。(40歳男性：自治体職員組合)

